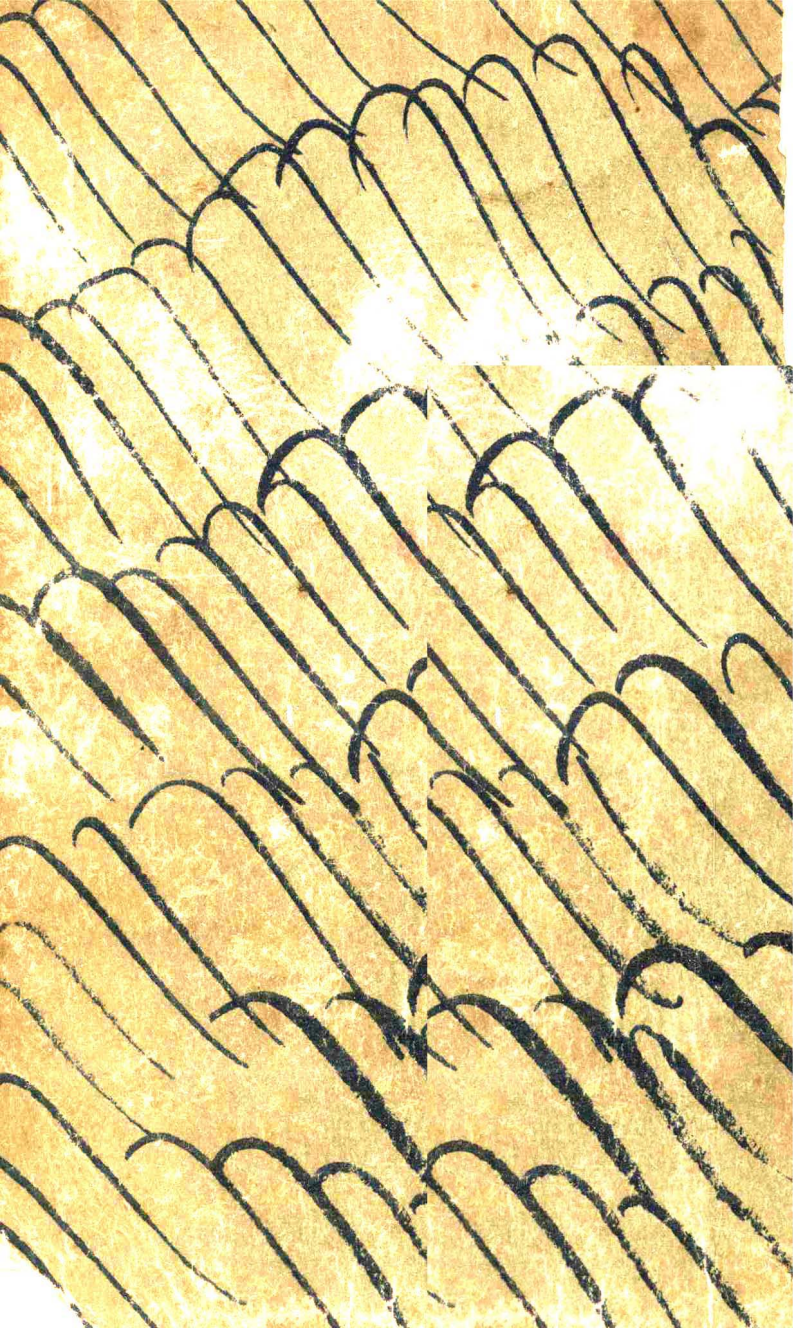




藍山青果選集

第六卷國定忠次外二篇

次忠定國

眞山青果選集第六卷

昭和二十三年一月二十日 印刷
昭和二十三年一月三十日 發行

定價 七十五圓

著者 眞 山 彬

發行者 尾 張 眞 之 介
東京都文京區音羽町三ノ一九

印刷者 齋 藤 芳 之 助
東京都文京區柳町二六

印刷所 齋 藤 印 刷 所
東京都文京區音羽町三ノ一九

發行所 株式會社 大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇
電話九段代表 二八一

(黑柳製本)

配給元 日本出版配給株式會社 (東京都千代田區神田渡路町二ノ九)

目次

國定忠次……………三

續國定忠次……………一三

鼠小僧次郎吉……………三二

國
定
忠
次

第一幕

時は天保八年六月の下旬。梅雨晴れの日の午後より夜にかゝる。處は上州佐位郡國定村養壽寺の客殿の一部。養壽寺は國定村無宿忠次の菩提寺なり。

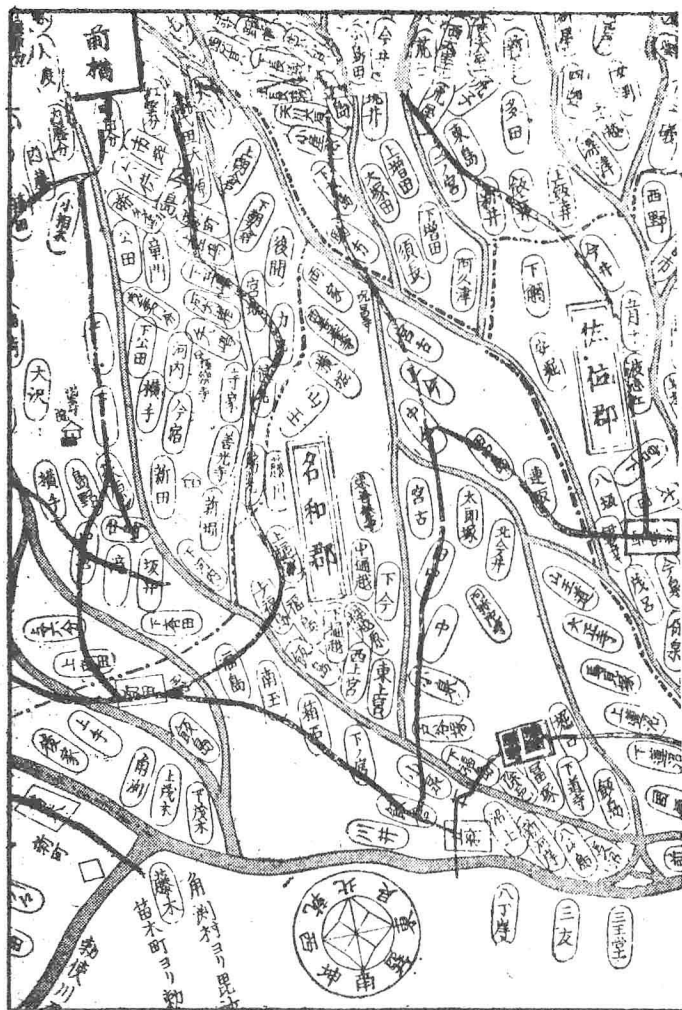
この歳は關東關西日本全國にわたれる大凶作にて、米價騰貴して四民飢渴に苦しむと共に、繭生絲の生産物は市場價格暴落して、農村の疲弊は、その極度に達し、既に今春二月には大鹽平八郎の暴舉ありたる程なり。

舞臺に見ゆるところは、鄉村の寺院としては不相應と思はるゝ書院造りの宏莊たる建築にて、廣間二室を打ち通したる客殿を内部より見る。廣間の上手には廣き板敷の廊下ありて鍵の手に屈折し、それを奥に入れば方丈及び内玄關に通じ、それを上手に歩めば本堂に通ずる。廊下の奥はささやかなる植込なり。

廣間は二室を通じて四五十疊を敷くべし。一方に墨繪をかけたる床あり、違棚などあり。下手の方は一面脇掛の高さにて窓造りとなり、正面奥は遊骨障子の開前にて本堂前の廣造りに向ふ。(障



上野國佐位郡・新田郡邊



(圖全地與國野上)

子の外は縁側、その庭面にはこの寺に有名なる笠松ありて、窓造りの下手よりかけて正面奥まで、檐を壓するばかりに這ひしげりて、青翠滴らんばかりに見ゆる。室内は疊新しく、障子白く、欄間の彫刻、長押の飾り、田舎寺としては堂々たるものなり。

幕あく——この日は國定村忠次のためには亡父吾兵衛の七回忌にあたる。當日は午前より本堂にその供養法會を營み、居村は勿論近村近在より知人親戚を招きて盛大なる佛事を終り、その後本堂内にて來客一同に饗宴をひらき、いま恰もその法會を終りて賑やかに散會せんとする時刻にあたる。

忠次の身内子分の者はいづれも本堂にて來客の接待にいそがしく、暮色やうやく迫り來る客殿には人影なく、忠次一人、悄然として腕を組み、深く冥想に沈むもの、如く、脇息にもたれるのみなり。床の間に足付の大臺に今日の引出物として配布する小判數百兩をそれ／＼紙包みとして積み重ね、それを大中小の三種類に分ちて飾り、一方には又今日の香典として諸方諸國の親分連より送られたる香奠、積檀、米俵、反物の類をその名札のまゝに飾り置く。

幕あく前より本堂内には手拍子に歌うたふ歡呼の聲聞ゆると共に、本堂前の高槽にては近傍の窮民を賑はすべく、子分等の手にて蒔餅の報謝を初めたるもの、如く、餅を奪ひ合ふ老弱男女の聲耳を聳するばかりに聞ゆる。

忠次（本名忠次郎）、この時三十六歳なり。その風貌は譚海の著者（學海先生）が、『忠次肥えて白く、言貌沈毅にして、平時は蠅蟻だも殺さず、而して人を殺すには目爲めに瞬がず、酒を嗜みて多く飲まず』と書きたる如く、俠客としての威嚴おのづから具る男なり。今日の服装は黒紋付の衣服、仙臺平の袴、鮫鞘の一刀、白足袋、極めて謹慎せる姿にて、その子分一同にも黒袖の紋服を着せ、麻袴を着せしめ、博徒らしき態度服装を嚴重に禁止しあるなり。

幕あきて暫くの間は、舞臺沈黙、たゞ本堂の歎聲と戸外の雜音を聞くのみ。や、ありて子分三本の文藏入り来る。二十六七歳、美男子。他の子分三四名、醬油樽數箇を擔ひ來り廊下に積む。

文藏 親分え。笹川の繁藏親分から使をもつて、遅なりましたがと御野菜料がときました。（香奠を出す）

忠次（目を開き）痛み入ったことだ。使の衆によく手當をしてくれ。

文藏 へえ。そして、本堂の御百姓衆にはどう致しませう。まだ引出物をくばるには早うござんすか。

忠次 酒はどうだ。充分に廻った様子か。

文藏（本堂を指差し）あの通りでございます。總座打通して、無禮講でございます。

忠次 氣持よく飲んでもらふのが何よりの供養だ……。 （嘆息して腕組み）
文藏 親分。そしてお前さん、お席には……。

忠次 少し斯うして置いてくれ。考へたいことがあるんだ。

文藏 (不安さうに忠次を見上げしが) へえ。

忠次 日光の、はどうした。

文藏 何んだか無性に當り散らして、庫裡に踏ん返り返つて寝て居ります。

忠次 日光の、にしては言分のありさうなところだ。ソツと觸らぬやうにして置け。

文藏 へえ。

文藏、去る。忠次、また思案に耽る。やゝありて子分武井の淺二郎、大聲に喚き立てながら本堂を出て来る。

淺二郎 (本堂の方に叫ぶ) おうい八寸の兄イ、神崎の、みな手をかしてくれ。お客だちに引物を配

るんだ、みな手を貸してくれ。(忠次を見て) 親分え。ぢや、何んですかい。この五兩包みの方は小前小作の貧窮組に施行して、この二兩包みは中通りのお百姓衆、こちらの反物の方は家持町人衆の旦那がたの方へ引くんですね。

忠次 煩せえ。文藏に聞いて見ろ。(顔を顰める)

淺二郎 文藏——? 厭やなこツです。俺アお前さんの家ぢや、あいつより古いんだ。おいゝ、何をしてゐるんだ。八寸の兄イ、神崎のウ、さアさ、施行だゝ。

忠次の子分八寸の才市、神崎の友五郎、ドヤゝと入り来る。

忠次 浅二郎！

浅二郎 何んです。

忠次 今日はおれの親父さま吾兵衛どの、大七年だ。一家親類、村の衆を招いて、心ばかりの法事をしてゐるんだ。施行とは、何んのことだ！

浅二郎 施しをすりや施行でござんせう。（ブンとして）村の衆とは云ひながら、ふだん出入りもしねえ小前小作の貧乏人を集めて、たらふく飲食をさせた上に、一人まへ五兩づつだ二兩づつだと、お前さんの身上全體を振り分けるんだ、施行でなくつてこれが何んです。

忠次 （云ふも益なしと思ふもの、如く）おれの金たア思はねえ。

浅二郎 へえ、それぢや……。 （坐つて）居屋敷は勿論、家財道具まで賣り拂つて、つくつたこの八百何十兩は、一體誰の金なんです。

忠次 みな、天下の金だ。誰のものと定つてゐる金は、世間に、たゞの一兩だつて有る筈はないのだ。

浅二郎 （むかツとして）親分。あツしや親分の氣賦も知つてゐるから、この金を惜しんで云ふんぢやありませんよ。が、いやに百姓衆にこびり付いて、七年の法事だの、口取がはりの引き物だのと、これ程の大金をむざ／＼泥溝に捨てることはないぢやありませんか。同じ施すなら代官所に願つて、大ッぴらに高札を立て、國定村忠次の村施行だと、なぜ世間押し詰れて遣ら

ねえんです。今年の飢饉は日本國中總並だ。關東關西の顔役衆にその噂が傳はれば、親分はその廉一つで、グツと男を賣り出せるぢやありませんか。なう、八寸の、神崎の、おれの理窟は圍子かい。

友五郎 然うよ。おいらもそれア……考へてゐるんだ。

才市 前に一言、親分からお話がありや……おいらも、考へ直して頂きたかつたのだ。

忠次 お前だちの不足も、考へなかつたのぢやねえ。が、俺は、この頃中から枕を割つて、思案に思案を重ねた上に、ヤツと踏切りをつけた今日の法事だ。忠次のためには、恐らく一世一代の思ひ出にもなることだらう。黙つて、云ひ付けた通り、今日はおれの手足になつてくれ。

淺二郎 親分。が、この紙包みをバラツと本堂へ振りまいてしまへば、お前さんは明日ツから、釜處なしの裸人足になるんですぜ。それは勿論、御承知のうへでせうね。

忠次 承知どころか、もとより望んですることだ。

淺二郎 裸人足になつては、近國諸方の親分衆への、義理順義にも事が缺けて、自然人中で顔を俯向けるやうな日も來ませうよ。

忠次 煩せえ、差圖がましい口をきくな！

淺二郎 へえ、悪うございました。ぢや、何も申しません。

忠次 才市、友五郎。くれぐれも氣をつけて、お百姓衆に、施し顔などしてはならねえぞ。下々の

者ほど、言葉を低く丁寧に扱へ。

才市等 へえ。

忠次 一昨年^{をとし}から引き續いての凶作に、おいらの代理に苦しんでくれるのが百姓衆だ。粗末に思つては、罰^{ばち}のあたることだぞ。

才市等 へえ。

才市、友五郎、引物の足付臺を持ちて、本堂の方に去る。

淺二郎 (ひとり残りて忠次を見詰めるしが、一膝進めて) 親分!

忠次 (舌打して) まだそこに居るのか。

淺二郎 今日^{今日}の法事に、伊勢崎から來たあの茶屋女は、ありや一體何者です。

忠次 お前などの知つたことぢやねえ。あつちへ行つてゐろ。

淺二郎 お前さんは、さう一々あつしを叱るが……

忠次 (かツと目を開いて) え、煩^{うる}せえ!

淺二郎 へえ。

淺二郎、面をふくらし不平さうに立つて行く。この時本堂の方に、拍手、笑聲、歡呼の聲一時にドツと起り、子分等の制止する聲それに加はる。貧しき農民等は金品分配と聞いて、われを忘れて、奪ひ合ひを演ぜんとしたるなり。

忠次、ちよつとその方に耳を傾けしが、嘆息してまた腕を組む。

伊勢崎の茶屋女お豊、そつと本堂を脱け出して、忠次に會ひたさに廊下を來かゝりしが、さすがにわが身を恥ぢるものゝ如く、積櫓の邊に立つて室内に入りかねてゐる。その日のお豊は、極めて質素なる農民の妻らしき服裝なり。

この時内玄關の方より子分某に案内せられて、伊勢崎の町藝者お町入り來る。少しく酔ふ。室に入らんとしてお豊を見つける。

(注意) この二女の經歷は、後章を讀むに隨つて明らかとなることなれども、念のため云へば、お豊と云ふは忠次がまだ農民生活をなせる時の妻にて、博徒生活に入らんとする時に離別したる女、お町は伊勢崎の藝者にて、いま忠次の寵愛をうけて内縁の妻の如き關係にある女なり。

お町 (お豊に) 何んだい、お前さん……。何んの用で來てゐるんだ。

お豊 (ツンとして) お前さんの差圖をうける者ぢやないよ。

お町 お前さんは、忠次親分と何か、引張り合ひのなかでも……。

お豊 忠次親分とやらは知らないよ。今日の佛様には、のがれぬ縁がある身なのだ。

お町 今日の佛様に——？

お豊 國定の親分に、お前さんから宜しく申し上げておくれ。蔭ながら御全盛とはうかつて居りましたが、これほど廣大なものとは思ひませんでしたと……。

お町 あ、好いよ。あたしから然う云つて置かう。

お豊 何、何んだつて——。(むらくとして脱む)

お町 何をさ。お前さんが、頼むから云ふんぢやないか。

お豊 へん、何を云つてやがるんだ。

お豊、お町にともなく忠次にともなく、一種の冷笑を投げ與へて、もとの本堂の方へ去る。お町不快さうにその後を見送りしが、やがて忠次の部屋へ入り来る。

お町 (忠次に向つて、立つたまゝ) 親分、水臭い眞似をなさるぢやないか。

忠次 あ、お町か——。(顔を上げ) 何んと思つて……?

お町 これほどの御供養をなさるんなら、なぜあたしにもお線香を手向けさして下さらないんだ。親分、たと然うなさるがいゝよ。

忠次 今日佛事は、忠次一人の志だ。世間さまに吹聴するやうな……事ぢやねえ。が、それにしても、どうしてお前は……。

お町 日光の兄さんからわざ／＼人をうけて、慌て、飛んで來ましたよ。

忠次 圓藏どんが、お前に使を立てゝ——? (ビリ、と眉を動かし、腕を組む) 然うか……。

お町 親分、あたしにだつて顔があるよ。今日のこの事を知らずにいたら、あたしや朋輩どもの手前にも、伊勢崎の土地にや居られない身になるんだよ。